



Title	指定質問者への応答
Author(s)	小松原, 織香
Citation	臨床哲学ニューズレター. 2021, 3, p. 102-106
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/79256
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

特集 4

第1回 臨床哲学フォーラム（ふるいにかけられる声を聴く）

テーマ：非人間・暴力・対話：関係性をめぐって

指定質問者への応答

小松原 織香

鈴木萌花さん

鈴木さんの質問を伺っていて、哲学研究者が現場に行くことの意義自体を考えておられるように思いました。私の友人に新聞記者がいますが、彼の取材の様子を見ていますと、的確に質問して、相手にもためらいなく踏み込み、必要な情報を取材対象から引き出しています。また文章もできる限り、客観的に書くためのトレーニングもしていますし、記事については社内のチームで検討して問題がないかチェックしています。そうしたプロのジャーナリストに比べると、私は絶望的に他人に話を聴くのが下手ですし、情報伝達に特化した文章の訓練も受けていません。ですので、私はいつも現場にいと「また、つまらないことを言ってしまった」「早く家に帰りたい」と思いますし、自分の文章も「また、長々と書いてしまった」と思っています。そういう意味で、鈴木さんの懸念は的を射ていて、的確なインタビューをして、幅広い読者に迅速に情報を伝えるのが目的であれば、記者の方が優れた能力を持っていることが多いと思います。私はあんまりインタビュアーに向いていません。私はほとんど何も問いません。

そして、鈴木さんと私の研究は、「声なき人の声」を直接聴こうとしているかどうかの点で大きな違いがあります。私は「非-人間の声」を聞いた人間の語りに焦点を合わせています。つまり、私の研究の直接の対象は語ることでできる人間です。それに対して、鈴木さんは語ることが困難である人たちの声を、直接聴きたいと思っているので、より研究の悩みが深くなっているのかな、と思います。ひとつとしては、ケアラーの語りを通して、認知症の人たちの声を汲み取る方法があると思います。または、ケアラーに、認知症の人たちの声が聴こえなくなっているとすれば、その原因がなんであるのかを考える方法もあると思います。

もしくは、もっと迂遠で気の長い方法もあります。それは、何もせずに認知症の人たちのそばにということです。私が実際に現場に行って感じることは、何も問えないまま、その場にいるというのはそれなりに意味があるということです。私は現場でインタビューはほとんどしないので、あちこちから聞こえてくる雑談や、ちょっとした小話に耳を傾けており、重要ではなさそうなことも含めて、囁き声をずっと聞いています。私は、鈴木さんが掴もうとして、言語化しようとしている「なにか」というのは、こういう膨大な時間の積み重ねの中で見えてくるもののようにも思います。「なにか」を明らかにすることを目的に現場にイン

タビューに行くのではなく、ただ現場にいて「なにか」が見えてくるまで待つというのも、ひとつの方法だとは思いますが。気が長い話ですし、成果があがるのかはわかりませんので、難しいですが。無駄に終わるかもしれないし、大きな実りがあるかもしれません。なので、この方法は賭けになります。

徐彬原さん

徐さんの質問にお答えする前に、ひとつ確認しておきたいことは、私のいう「当事者の声を聴く」という話は、法的な枠組みの外側の話だということです。特に徐さんが三点目に挙げられている、医療における自己決定の問題について、他者が選択を代行するというのは、「法的に誰に権利があるのか」が議論になります。こうした議論は医療現場では重要になりますが、私は権利の問題ではなく、もう少し広い、個人的で感情的で、お互いの関係の中で生まれてくるコミュニケーションの問題として、「当事者の声を聴く」という話をしています。ここは最初に前提としておさえておいてください。

さて、「亡くなった人」の声を聴くことについて考えたいと思います。私は、「死者の代弁をすること」と「何かの声を聴く」ということは、イコールではないと考えています。たとえば、人類学者の下田健太郎さんが『水俣の記憶を紡ぐ―響き合うモノと語りの歴史人類学』（慶應義塾大学出版会、2017）という本の中で、水俣で患者さんや支援者の「石像を彫る」活動を分析しています。そのなかで、ある支援者の語りが出てきます。その支援者はずっと交流していた患者さんが亡くなったあと、石像を彫っていたのですが、像の顔が患者さんと似てきたそうです。支援者は、最初は石像の顔が患者さんの亡くなる直前の悲痛な表情に似てしまったと思っていました。ところが、石像を野外に設置していると、雨風で石の表面が削れてきたため、不思議と像の顔がやさしい表情に変わってきたそうです。支援者は、その石像の顔の変化を通して、親しかった患者さんもまた、苦しみや激しい怒りを持っていると同時に、柔和な人であったことを思い起こしています。これは、石像を通した死者との対話とも言えると思います。こうした営みは「死者の代弁をする」のとは違うように思います。死者の代弁をするのではなく、その人の存在そのものが浮かび上がってくるような、そういう声の聴き方があります。

ただ、徐さんの懸念はよくわかるものです。私も勝手に自分が当事者の声を解釈し、都合の良い主張をしているのではないかという不安は常にあります。お話ししたとおり、私は、インタビューは苦手なのでほとんどすることはありますが、論文の中で当事者に言及するときには、自分が書いたものをご本人に読んでいただくことがあります。ご本人に原稿をお見せするのはいつも緊張しますし、的外れなことを書いているのではないかと不安なのですが、ご本人に自分の書いたものを発表する許可をいただけるのが、一番良いとは思っています。それでも、直接連絡するのが難しい方や、亡くなっている方はいらっしゃいます。その場合は、「文献研究」として割り切り、できる限りの資料を読むことで、確認に代えさ

せてもらっています。しかし、許可をもらおうが、資料を読もうが、勝手な代弁になっているのではないかという不安はいつもあります。

そして、徐さんの指摘するとおり、環状島モデルは人間の心理を理解するために提起されたものです。これは、通常の間が言葉が話せる状態にあり、それができなくなった特殊な状況をモデル化していると捉えられます。そのため、動物はもともと言葉を持たないので、〈内海〉から支援者に陸地にあげられるというのは、人間と同じようにパラレルには考えられないという指摘も的確だと思います。つまり、人間はもともと言葉を持つからこそ、〈内海〉に沈み、だからこそ自己意識によって支援者の助けで、そこから抜け出そうという意思を持ちます。なので、トラウマからの回復のパラダイムで考えるならば、確かに環状島モデルは人間にしか適用できません。

しかしながら、私はもう少し広い射程で環状島モデルについて考えています。たとえば、私は詩人の石原吉郎や、画家の香月泰男に影響を受けています。かれらは、シベリア抑留を経験し、日本に帰国してから、その経験を詩や絵画の中で表現しました。そして、かれらはシベリアで、収容所から脱出する意思すら無くし、沈黙したまま亡くなっていった人たちを目撃したことを証言します。言葉も話せず、〈内海〉に沈んでいった死者たちに、支援者の手は届きませんし、回復の道也没有ありません。そして、かれらを目撃したことを、石原や香月は作品を通して伝えます。私は、環状島モデルを回復のパラダイムとは切り離し、「なにかを見てしまった人たち」「声を聴いてしまった人たち」の証言をどう捉えるのかという点から考えています。

突き詰めて考えていくと、「他者の声を代弁が可能か」という疑問に対しては、論理的には「不可能だ」という答えしか出せません。しかしながら、実際に声を聴いてしまった人たちの語りを聞いていると、こちらが切り捨てられないような重みを持っています。そして、私は「当事者が語る」ことも、常にこの「誰かの声を代弁している」とことと重なっているようにも思います。たとえば、性暴力の被害体験を語るというのは当事者にとって大変な苦痛です。なぜ、その苦痛に耐えるのかについて、何人かの当事者が「仲間の想いを背負っているからだ」と私に語りました。つまり、自分一人のためには語れないことであっても、他者の声と自分の声を重ね合わせて、代弁を含む語りになったとき、語ることができるということです。当事者の声は、常にいくつもの旋律が束ねられ、重層的に響いているようにも、私は思います。

かつらのぐちゆいさん

かつらのぐちさんが、事前原稿の中で「誰かの語り」を聴くことと、「誰かの哲学」を聴くこととの差に着目しているのは良い直感だと思います。目の前の人語り出したときに、それが「語り」ととどまる場合は批判せずにそのまま受け止め、「哲学」になっている場合は批判的思考を作動させるというのは、私も経験上、よくわかります。私はこの二つの聴き

方のモードを「重み」と「正しさ」に分けています。たとえば、当事者が語るとき、間違った情報や、明らかに嘘であることを話し出すことがあります。そういうときも、私はそのまま言葉を受け止めようとします。ときには、ほかの当事者への差別と思われるような語りが始まることもあります。私はそうした当事者の「語り」が、正しくはないと理解しつつも、その人がそれを発さざるを得ない「重み」は受け止めようとします。

しかし、人間が語り出す場に立ち合わせたとき、「重み」と「正しさ」はすっぱりと切り分けるものでもありません。たとえば、私は大学の授業で講師をしています。授業では学生の語りは、「正しさ」によって批判的に議論されるべき対象のはずです。他方、私は授業で戦争や環境問題、医療問題などハードなテーマを扱います。そうすると、学生が深く心の中で受け止め、「自分の経験」と目の前の「哲学・倫理的課題」を直結させ始めることがあります。自分の病気や障害の経験や、家族に起きた出来事などを直視し、その「当事者」として語り出します。グループワークや論文の中で、かれらは「当事者の語り」を始めるのです。そういうとき、私は顔には出しませんが、動揺しています。授業の枠組みにおいて、かれらの発言の「重み」を受け止めるだけで良いのか。しかし、切迫し、実存を賭けてこちらに訴えてくるかれらの語りを「正しさ」でジャッジしても良いのか。そういう問いが頭を駆けめぐります。私は大事なものは、こうしたときに起きる「揺れ」でもあると思っています。上手に「重み」と「正しさ」を切り分けることにあまり意味はなく、自分がその揺れを感知し、状況を把握することこそ意味はあるのだらうと思います。「当事者の声」と「哲学」を分けて、安全な位置でそれらを冷静に観察しているときではなく、目の前の語りに動揺して「どうしたらいいのだらうか」と迷っているときこそが、大事な声を聴いている瞬間なのだと、私は考えています。

では、なぜ、私はそうした語りを、哲学の論文にしようと思うのでしょうか。一つは私の「欲望」の問題があります。私は地位や名誉にはあまり興味はないのですが、「書くこと」への欲望は研究者の中でも強いほうだと思います。哲学の論文についても、「面白いものを書きたい」と人一倍思っています。ただ、自分の欲だけではとても水俣については書けませんでした。水俣病の被害は深刻で、その後のチッソの不正や行政の対応の不備により、地域の人々のなかにある深い傷跡は今に至るまで残っています。また、多くの作家やジャーナリストが水俣について書いており、私のような駆け出しの研究者が論文を書くことは勇気のいることです。きっかけになったのは、2015年に資料調査をしているときに、水俣病患者の川本輝夫さんが、晩年に「水俣病運動に哲学が欲しい」と語っていたと知ったことです。その頃の私はまだ、水俣について自分がどんな研究ができるのかもわからなかったのですが、「水俣に呼ばれた」と思いました。これは完全に自分の思い込みですが、一步を踏み出すきっかけにはなったと思います。

「哲学に何ができるのか」の問いにはいつもなかなか答えが出せません。私が非-人間に関心を持ったのも、水俣病の患者さんたちが海の生き物について語っているのに気づいたからです。1970年代後半から80年代にかけて、一部の患者さんたちは「不知火海 100年

の会」という小さなグループを立ち上げました。患者さんたちは、水俣の海の魚介類をたくさん食べて水俣病になりました。かれらは、海のそばで生まれ育ち、その恵みのなかで生きてきたからこそ、魚介類が毒されたときに水俣病になりました。「不知火海 100 年の会」では、患者さんたちが水俣の海と生き物たちについて、自分たちで調べ、ときには一緒に食べながら、研究を始めます。いまふうに言えば、これは「当事者研究」なのかもしれません。これといった成果は出なかった活動なのですが、こうした患者さんたちの非-人間にアプローチするぼちぼちとした営みがあることを知り、こういうところを伝えていくのは意味があるように感じました。そして、こうした活動は、きっと全国のあちこちにあり、私の予想もしないところで、似たようなことを考えてきた人たちはいると思うのです。そういう人たちに向けて、私はボトルレターを投げるような気持ちで論文を書いています。ここにいる当事者の小さな声が、私の論文を通して、全然別のところにいる当事者に届くというのは、哲学にできることのひとつではないかと考えています。